

## ま え が き

10年間続いてきた信州大学環境問題研究教育懇談会は、信州および全国に対して多大のインパクトを与え、今後の発展が益々期待されていた。この発展を更に維持、展開させるため、従来の命題である“信州の環境保全と地域計画”の名称を、“ハイテク時代における信州の環境保全とその創造”と題して、ともかく今後三年間は活動を継続することとなった。そこで、全会員から希望研究テーマを募集した結果、17の研究課題が集められた。その中には、アズミ野の湧水の合理的維持管理システム、諏訪湖、木崎湖の浄化、ゴルフ場の問題、都市圏の固形廃棄物動態、スパイクタイヤ問題などのように、直ちに社会の要求につながるものと、やや基礎的なアプローチを示すもの、たとえば、自然環境の生物指標確立、総合研究推進の理論的開発と言ったものも含まれていた。そこで今年度は全てを重点課題とはできないので、三つに絞って、研究グループを発足させて貰うこととした。その第一はゴルフ場問題で、班責任者は桜井善雄教授、第二は生物指標の問題で、森本尚武教授に、第三は今回の特定研究のテーマそのものについて、村山忍三教授にお願いすることになった。これら研究の進め方については、今後とも十分な討議を班の内外で、続けて貰いたい。冬季オリンピックの招致も話題となっている長野県の自然環境の保全と“ふるさとの創生”は、今や日本的課題でもある。

今回、ハイテクを利用した会員の活動実績としては、信州大学に設置された画像情報処理ネットワークの使用による全学研究集会（11月19日）が先ず挙げられる。この時の模様は録画されたので、調整がつかなくて欠席となった二学部にも回覧されている。当日は長野市の工学部の野村彰夫助教授の南極での研究を松本でお聴きすることができた。この様な便利なシステムを今後とも利用することも大切ではあるが、年に一度以上は、直接会員相互の触れ合いも必要と考えられるので、1989年1月14日には松本で全学集会を催すことができた。

1989年3月

世話人 上田五雨